

一、原論

[素謡]・・・素謡の基本

(イ) 無本謡に興味をもつ事

素謡稽古で気楽なことは、習った所を覚えなくてもよろしい、次の稽古に支障を来さない限り、非常に温情ある習い事になっております。

その役になりきれといわれても、見本（ケンボン）謡では限度があります。

能では面（オモテ）を掛け終わった時は、心も身体も完全にその役になりきっております。

仕舞も無本ですから少しづつ進歩してゆくのがわかりますが、素謡ではさっぱり目に見えてきません。いずれにしても、素人は無本の機会を多くして研鑽しなくてはなりません。

又、謡曲文の内容は如何といわれますと、『謡曲は、一見、美辞麗句を連ねてあるが、これは皆他人の文章の引き抜き寄せ集めであって、即ちつぎはぎ文学であって、価値の低いものだ』といわれておりますが、これは謡い物であって読み本ではないからです。

よほど文章に巧みな力がなければ、あんなにうまくつぎはぎが出来るものではありません。

謡曲文を読み物としてみるのは、すでに出発点が誤っております。

能に適合するように作られており、又、節をつけてそらんじて謡う点に大いなる価値があるのです。

(ロ) 節を謡わない事（役を謡い、曲を謡う）

これが、素謡の根本です。（仕舞では型を舞わない）

心で、何を謡うか、いつも心がける必要があります。

謡を謡えということです。

(ハ) 全身の力を抜く事

カの入った声、調子の高い声が自由に謡いこなせるようにならなければなりません。

それには全身の力を抜く事を必要とします。

目標は、楽に声が出ることです。

(ニ) 男女調子の合わせ方

普通のサシ謡がすんで、下歌を出す調子で合わせるのを最も適当とします。